里見八犬傳 拾 二編 卷十九

へ13
709
67

曲亭馬琴著

八犬傳

東京名山閣版

第十二輯

遠門 13
號 709
巻 67

明治三六年十月九日購求

南總里見八犬傳第九輯下帙中巻第十九簡端贅言

本傳は文化十一甲戌年第一輯五巻を綴り創る。今茲天保八丁酉年に迨て、茲慮二十四の春秋を歴る。其間作者の履稿、或は流行に據り、昨の我が厭倦を趣を易文を異にして體裁同からざるもあべし。しかれども何ぞとなれば始は只通俗を主として綴る敢奇字を以せざるの故に行毎に假名多く、七真名寡し。六七輯に至りては拙文唐山の俗語を抄録載て且意訓をもて彼義を知あむ要を所為に似れども、世に獨学孤陋の唐山の稗史小説を讀まく欲する諸生あり。其が笠蹄を忘れ、と思ふ作者の老婆親切なるもて行毎に真名ヨマクをもて字の數さへ覚ぼ始に弥増す。抑曲学ゆく要を紀書を好まそヨマク綴り易。余が如き忽せ文は半表半裏の筆に成れるを知ざるにあらねども畢竟文字を婦幼の弄びに資る故にあれば故に風流たる草子物語は取て吾師に倣べくもあれ、又彼唐山の稗官小説の大筆にして奇絶るものを文は摸擬に要る。然ばとて坊間に寫本を紀ふ軍記復讐録の類は俗の看官もまため

べく。余も素より綴まく欲せざるの故ふ五文へ枉て雅るゝ俗るゝ又和もあるゝ漢もあるゝ駁雜
杜撰の筆をもて漫ふ綴り創りより世人謗りて遐げ棄ぬるぞ中ふ本傳ハ甚う時好ふ稱ひく
憶ぬも一百四五十回の長物語ふ做りふけりそろそ年來五机案上の工夫を慇ふ切磋琢磨せ
る自得の戲墨るあるゝかくの如くふあるざれば唐山る稗説の趣を寫まふ由そ然ハあを彼ハ文
華の困るれハ俗語とゝも出処あるて悉字義ふ稱へる但正文と異る所以ふあ用同ドかゝ所ふ
よりあり壁ふ正文ふ慚愧とハ即恥る義るゝ俗語ふ且忝ふとふ義ふも用ひる又工夫ハ考
索思量の義るゝ俗語ふ空虚閑暇の義とを工ハ空の省文を夫ハ助語るれば即空を
ゆく俗語の和訓ハその処ふよりて異同あり然るゝ原を極めゞて此間ふ抄録まる俗語とのゝを
取用ふハ大く義理の違ふとあり筆の次ふひとハ二ハ水滸西遊るゝよ在を於の如く像と如ゞ
似のゞく則と唯のゞく讀まるハ其文ふ法則あ叩用るふあるゝ似を讀て如とまるハ似飛ふ涯
則を讀て唯のゞくまるハ不則一日ふ涯の像を讀て如とるゝ用ふゝ況教の轉

を叫ふ做まる。激ハ尿の轉ゝ鳥ふ亮る。人を罵る時ふ底の轉ゝ地ゝ做り又轉ゝ的まれる一朝ふ
解畫をゞくもあるゝ我 大皇國ハ邈古の久ゝ以りゝ文字の製度を言魂を宗とあるゝ。
應神天皇の御時ふ初て漢字を傳へしより後の世ふ至りて人の詞ハ漢氏物語る
ゞ音訓ふ仕る文れば自後々ふ和漢駁雜の文章の必らず來ぬ勢を
又一轉ゝ假名文ふ唐山の俗語を諧記の隨取用ふ。余ゞ文を國学及漢学の博
士達倘その眼ふ觸るもあるゝの駁雜を嘲噱ふて云云とゝ所べゝん遮莫唐山を俗語の
綴まる書ふ正文ある方言あるゝ所べ用るゝ所べゝ又儒書方書佛教ハ正文るゝ者れども
そゝ中ふ俗語あるハ二程全書朱子語類俗語を綴りハ奇功新事傷寒條辨虚堂
録光明藏の類ふあるゝ。先輩既ふあの辨ある。佶れば彼ゞ文華るゝ言魂の資を借ざるべ
文を成ふ如意るゝ矧亦 大皇國の文章ハ和漢雅俗今古の差別あ然ゞ今文場ふ
遊ぶ者孰ゝよく貫通せんとかゞるゝ難ゝ意ふ古昔の草子物語竹林宇通保源氏

物語ども作者勉てその詞をまゐらせ撰てまゐらせ綴れるまゐらせ候べし必是當時大宮人の常語方言さへそなほ隨ふ載られと古言いかのつくり鄙俗をもまた宮嬪の詞あり雅俗ともに任しるるあれど海人藻芝及真淵の甘結さへ一さへ思へば才子才女はその品殊なる且能文の所為なれば後世和文の山斗たる佶れば甚草子物語の此ふも俗語にて綴れるを思べし和漢その文異なれども情態をよく寫しぬるその趣を盡せば者俗語をもれば成ること難ふ彼我同く一揆なる然ばとも今此間の俚言俗語の轉訛殊離の甚しきをそなほ儘文ふるべきに余が駁雜の文あるその殊離鄙俗を遁れんとも近世建部綾足が西山物語及本朝水滸傳（一名吉野物語）いかさま古言をも綴るのみなる就中本朝水滸傳その趣淨瑠理本ふるふ似る條あるを今の俗語もまたよれい米ふ竹を接るをもまた時好ふ稱ざるけん僅に二編をも果さざりけり（第二編寫本あり）又村田の翁が筬志船物語（今古奇觀第二十六の翻案小姐忍辱報讎言柏案驚奇ふ此と相似る物語あり）その文同じくして益別詰へ（とふ一編）皇國の故事ふ翻案して古言のまま綴まゐらせ然ばも能文の所為なれば必初學の為ふ資助るまゐらせむ惜むべしその翻案半分をも省

墮損を易ふるまゐらせ門人ふ續ぎ者あるを原本の局を果せりと吾一知音の咳けりそも國學者流をもまた和漢の稗史を愛る餘力あれば是ばかりの俗の看官のまゐらせその書を知るもあ狹ばかりをも廣くまゐらせの勸懲を旨とし書讀むをも好まゐらける世の婦幼もまゐらせ讀まゐらせ余が如くまゐらせふるもあるべくまゐらせ稗官野乘の鄙事をも好とまゐらせ思ふまゐらせども本傳結局遠まゐらせば筆を費せり百年以後の知音を俟べし今より後の朝嘆議論を解ぎまゐらせ丁酉の秋八月念六日東園黄白の木犀花馥郁たる南檐の下ふまゐらせ者ふ著作堂の癡老

蓑笠漁隱

附て云前板第九輯下帙の上巻毎ふ校訂の遺漏あり書賈が發販せ後ふそを見出せば因て左ふ録してのち送忘ふ備ふ。

○前板第九輯下帙の上 十三丁十四より十八の巻ふ至る 五巻重訂追録（是より下は第六頁端像の左ふ續ぎて可し。驗べるべし。）

文溪堂藏

南總里見八犬傳第九輯下套中摠目録　九集　四版

巻第十九

第百二十六回　假捕使三路行兵　義兄弟兩林懲惡

第百二十七回　大庵尼親兵衛喪伴　石菩薩前信乃悟應報

巻第二十

第百二十八回　犬士露宿迎追隊　老僧寒祇示冥罰

第百二十九回　忠僕事死靈佛起本　孝子去京傳燈法脈

巻第二十一

第百三十回　里見侯白濱葬旅櫬　大法師穂北果客情

第百三十一回　八行靈玉光增良主　九歳神童氏請花營

巻第二十二

第百三十二回　金碗無後要有後　妖雪失望反遂望

第百三十三回　哄客船水窓鬼沽酒　没波底海龍王刺仁

巻第二十三

第百三十四回　苛子海中與保探千金　蕃山窮難照文逢一將

第百三十五回　渥美浦便船送紀二六　骨領邸禍鬼抑親兵衛

八犬傳第九輯下套中摠目録終下套下近刻當至大團圓焉

小山左衛門尉朝重
将種自賢賞罰法天
賢成朝
猿渡判官成朝

たくさんともたえぬ
佛を人ゆゑたのみ
きえまもやむねふ
あり明の月
賢淨西法師
鼓僧淨西
兄僧蓮用

葉知顕職
富貴聚身
人間孝子
釋氏忠臣
賛僧正影西
六道山
能化院教主寺本堂
渥美郡領
隣尾伊折
権僧正影西

今純友
査助太
汝是西濱漁網魚
豈知東海有余且
海龍王
俗姓五郎
八犬傳九輯卷十九

第九輯下帙ノ上 十三之十四 總目録 二丁ノ左 徳 且 徳くの同 九丁右 五行 憩へ 誤写 同 九丁右 九行 老温 誤写 当ふ

温ふべし 同 十六丁左 五行 竹塚 字を脱 同 十七丁左 十一行 稱え 同 十七丁右 十一行 向て 同 十七丁右 十一行 点

同 二十丁 番 左六行 王 主 誤字 同 二十丁 左七行 犢鼻褌 褌 左のつぼる フンドシ

○十六の巻 十行左 題目 牢 誤字 当ふ 牢 当ふべし 同 十六丁 左七行 冲り 同 十八丁 右五行 妖僧奴 僧の誤写 当ふ 尼 当ふべし

○十七の巻 二丁左 七行 聽 誤字 聽る 同 八丁右 八行 稲城 誤字 当ふ 稲村 当ふべし 同 八丁左 二行 浮浪の身 身の作者の人 失り当ふ

当ふべし 同 十三丁右 初行 件々 誤字 條々る 同 十七丁右 初行 召復る 同 十九丁左 七行 点

黙 同 廿四丁右 二行 歴 同 廿六丁右 六行 昨日 作者の失 当ふ 前日 当ふべし

○十八の巻 二丁右 徳 徳 同 六丁右 十一行 世よ 世の字 せよ 同 十二丁左 初行 四 誤カ 匹 同 十九丁左 六行

又按ずるに第九輯上帙の自序 二丁左 五行 山中狼之介とある 暗記の失 山中 當に品河に作るべし 又

第五輯より処々に出る 上野の白井 土呼 越後人 牧 忠告せられ 然が井 助

字を假名に違ど本文白井の傍訓あるとる不ざるべし。 井を活字とされば当る字のよう考。 前板重訂抄録 終

南總里見八犬傳 第九輯 巻之十九

東都 曲亭主人編次

第百三十回

假捕使三路に分て兵を行る

義兄弟両林は悪を懲す

復説堅名盛司經稜根生野飛雁太素頼は鄙に逸匹寺の客殿に住持德用が意見に儘して長城惴利们と三隊に分れ緝捕の計議に違ず這隊を則寺の悪僧陸繹坊堅削と先鋒として後に僧俗二百五六十名、大庵を投て推寄せ既にしてその間遠くもあらぬ程に正よ去向の茂林の中より黒烟立升りて猛火の光見れけり當下堅削眼早く原来那奴们我の間に欲這方の機密を猜ーけんやよ亦兵毎那と

天ト目今庵を自焼して他郷へ走るゆゑあらんぞ捕ゑ迯ーそ皆急ぜねと聲高やかに

罵示して連りに找む程ーもあらぬ憶らぬ久居東の茂林に一行の句と寫ー旗三四

流樹の間に在り。曇勝る四月の天の雲餘波なく吹拂ふ風のまゝに閃めく思ひかけぬ敵も亦二隊に別れ。光景は堅削疑訝りて。隊勢を制めて。左右なく找まゝぬ。後陣を等て意見を問ふ。經稜素頼も亦これを相て。噪ぎる氣色もあらざるに。堅削かりあて經稜は馬上に堅削をとらへて。御坊金毛ふ狐疑まゐる那首ふ旗のこゝ色まべとく。竜れる敵のあるべきや。大いに人を聚合し奴们這方の軍議を鼎着ん苦あれ隨の拙策のゝ。那い奇兵の術もそ。東の茂林ゆも敵居ヨ竜れりと思はせて寄隊と住めて。開げ閉ふ落延んとこゝを計りけり。烏滸るゆとと冷笑へば素頼然るりと點頭てあ議寔ふ違ふべきゝ。非除、大の施主るゆ。安房の里見の家臣でも十餘名ゆ過ぎざるべきふ由縁もゆゝ。這地ふ来て火急の難義あれどそ。誰と憑て加勢ふせんや。とへば經稜然べとよ。推量明白る上は東い要るれふ似れども。萬ヨ一の與るれば堅削御坊い東へ向ふて。敵の虚実を探りあへ猜る如く敵あらざるべきく隊兵を這方へ找めて。

庵の邊ふ在る敵の尚退らで戰ひ剛くんとゆく横鎗を入れあそ必勝の挣をんとらふを堅削うち所てその議いろるいへども師父の軍議ふ任せられて。拙僧先鋒ヨ找ゝと敵ふらんと思るゝ東の茂林へ立別れてうち向ん本意よあらんと推辞めば經稜焦燥て開い亦雲盆の議論へ今ゝ這里を役ふ足らて。時を移さば敵い甚思ひの隨ふ逃亡てん和僧介もそふ思ひ。洒家東へうち向ん然べとてヨ勢い要る。我伴當と列卒毎と莊客们ヨ之が一ツ。相別まて從ひ来よと。辭急迫く言ふゝ猛可ふ二隊ヨ引ひけて東へ馬を早むれば始よりて戰ひを好ざりける莊客们い敵るゝんとられる東の茂林を得意れと思へば定の數ふ錯ひて我もと。經稜は後ふ者のゝべければ堅削ば隊ヨ隷て來ふ子院屬寺の法師武者ヨ亦二の足を蹈も有て我们ヨ是出家るふ今剛敵と戰ふて。分捕功名もれべとて。武名を偽ん子孫いあらば所領の主ふるゆもあらば可惜命を的ふまて敵の方ふ向んとる東へもとそとあれと一人ばへ領くあり甲ふ耳ふひふ亦ふ。俗へて經稜ば。

文溪堂藏

馬の尻趕ふ野計別ふ素頼堅削聲苛立て鉈や兵毎吽違へ欣然いも要み
紀東の茂林へ若们ちでら西くと狭這方へ来ぎそと唤れば素頼が列卒伴當们も聲を
資て唤禁れぐも吽奴態して咸歩早ふ[illegible]る者ぶふ[illegible]素頼も堅削も赤れく
一霎時長覩て在りそぶ中ふ堅削い肚裏ふ思ふ。咱一朝の怒りふ乗しく法敵
たる、大们を捕捕すく思ひつ。既ふ先鋒の頭人くるふ今憶ぎも野計別しく隊
勢寡くるふけ。這隊の挿紀心許ゑ。我も東へ適ふ不如と主意しても猶只管ふ
焦燥くる面色ゑつ。素頼ふうち向ひて[illegible]如く荘客们も我黨も三ぶ一ッと吽違へ
け大くぶ[illegible]の隊を離れ[illegible]ん軍令笞雨ふ似て不便ぶ拙僧ゑく赶鬼て皆悉領て
来て。ゑ身い徐ふ馬と找めそ頭陀ぶ庵ふ推寄せゑ拙僧程ゑかゑ来て後陣ふ績ふく
新隊とそて相資いて。とふふ素頼領紀て。[illegible]蒐ゑと答ゑ間ふ堅削い眉尖刀
肱腋ふ引着て飛ぶ像く走去け。小程ふ素頼い堅削と目送ゑ。[illegible]在りけるふ。

東のくさふ処々ふ榛樹嫩杉ヨヲれい徃くも還るもアえゑ[illegible]ゑ隨ふ心ゑく焦
燥て左さる右さる思惟るふ隊兵寡くゑりーかど尚ハ九十名い這里ふ在ゑ。開と堅削们が還
るとそて虚ゑとして時を移さぶ。躬方の虚実を敵ふ知れて頭陀们い遠く逃亡てん小らん
実我さふ怯れゑとそ。經稜ふも又惴利ふも笑れん敵い他郷の旅客ゑれ骨ある奴们い七八名狭
十名ふ過ざるぶを我隊兵ふ比ぶヨヲ寡ゑの知れる敵ゑ克ぎとらんとあるべくぶと尋思ふ
は。隊兵们ふ支怠ゑとゑゑ[illegible]ゑて、大庵へ推寄るふの折ふ[illegible]ゑ敵の自焼ふ烏
実迷ふべくもゑ[illegible]れい、大の庵へ近着程ふ早一町ふ足ぎゑ浩処ふ能化院の星額長
老い逸足寺の衆徒と城の士卒と和解て[illegible]事ふ扱んとそ九個の徒弟と相倶して走りそ前
面ゑり来ふけゑと素頼ゑ[illegible]ゑ佐とそ那奴们い問でも来る。、大を幇助しく[illegible]法會と
果しそ還るゑん遣るゑ逃しそ捕捕れ一個も漏ぎべくと劇しく下知ゑ逸足寺の悪僧们い
皆逸早く兼り及と答も果ぎ士卒ふ先ゑ突然と走り蒐れる熟鳥鳥の勢ひ當るべく

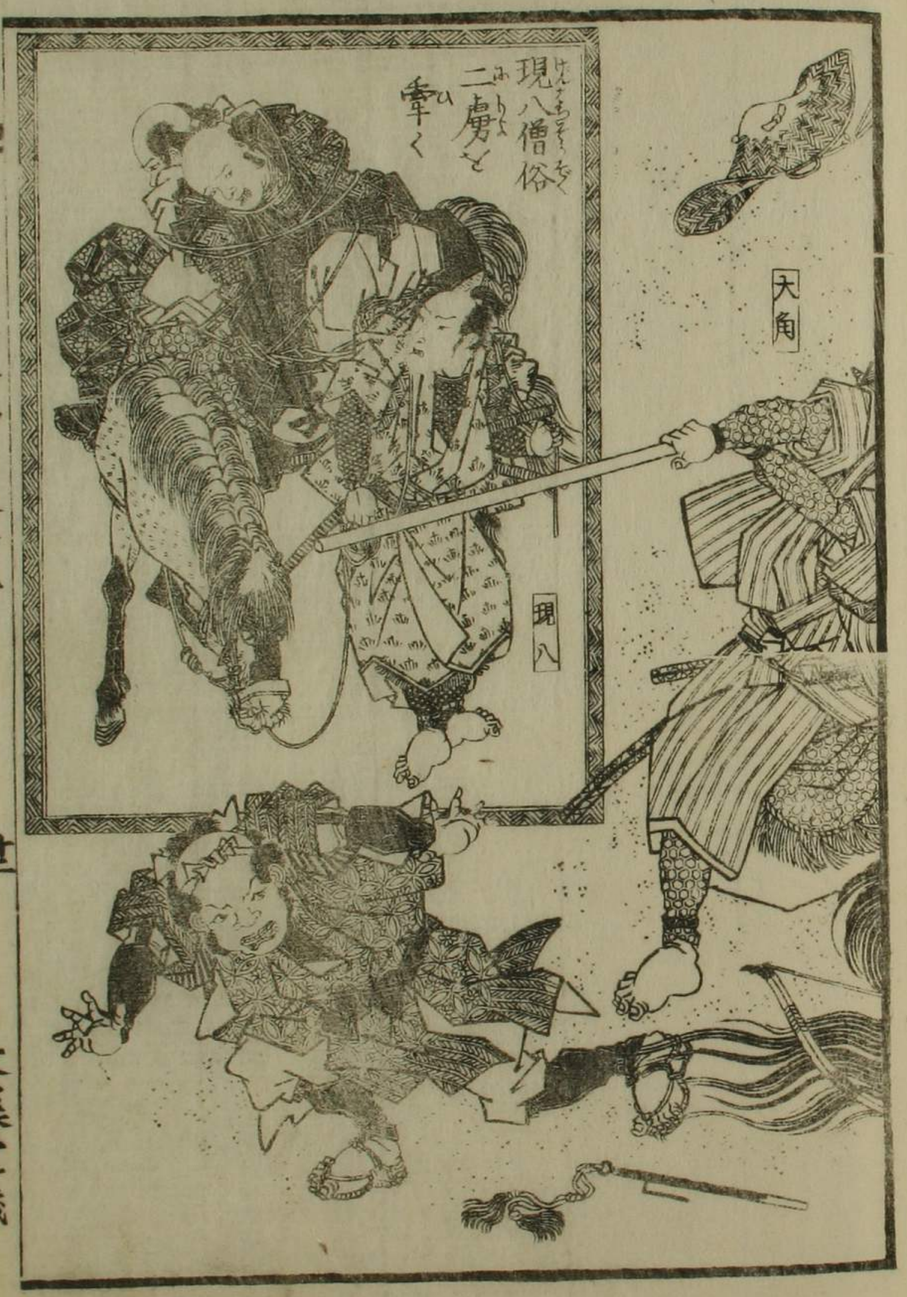
もあらばれば星額長老徒弟們は駭慌る聲戰〻く。あち人々理不盡慌て疎鶻
るあひそらあと叫べども耳も被ぜ輟る倒〻。或は蹴返〻突跌俯して一個も餘さ
ず犇々と捕縛被てそ牽立る所場勇〻かりければ素頼覩て懼び。盛も法師達で
かしう。その賊僧們を這頭ふ置ば、大們を搦捕る折ふ脚る蚤縁ふ咬ぶ〻ん今來〻方ふ
牽退けて西三人とそよく衛りね由断しそうふ復されそとうふ悪僧們ふろ紐そ牽立ん
と欲むるふ星額師弟は云云と勸解て毫も身と起さず罵り怒る悪僧毎果〻ふけ
きば十個の法師を一個々々ふ擦抓む膏力自慢ふ十個の肩へ米苞の像くうち載く被
擔連てそ舊路へ撤聲揃てそ去けり。當下根生野素頼は隊勢と找る樹柢の間
より。庵頭ふ近着て前面と伝とうちそれは尚燃殘る猛火と背ふ十間許前と出て
儼毅立さる勇士あり。是則川人ふ〻ぞ。道節毛野の二大士之左右ふ從ふ両個の瑕兵も
各持る捍棒を或は突立脇挾そそ来れる者は是誰やと問せも果ぞ根生野素頼

騎馬苛め紀聲も尖鋭く若们竜礼島滸の僧俗近曽這頭ふ庵と締びく。嘉
吉のむし戰殺ふる列将士卒の菩提の與とそ人の憑必念佛三昧法會の今日ふ及ぶ
まで圍の守さる結城殿ふ云云と請禀して支の免許と羨ちなくぞ況這地の大刹ふ逸足寺
その美と告て衆徒の幇助と借んと欲せぞ貪民乞児ふ施行ふそ恩義を示まい。奇怪ふ
むぞ意ふ是若们は隣囲の間諜児欲仆ぞ謀叛の奸賊ふむ搦捕て領てまおれとある。
當館の御諚ふ依て根生野飛雁太素頼ぞ來る之似而非頭陀、大ふ那黒在る今日捕
隊の頭人は我一隊のみふぞ我同僚ふる両勇士長城枕之介惣利堅名衆司經稜们も
隊兵並ふ逸足寺の加勢の大衆と從て八隅隈ふく捕稠られば水も漏さず火ふも焼せず然
〻大〻資けふる十個の賣僧はれらのようを少知ふる狡猾せ〻狡猾とふ我馬前ふ撞見
ふられば一個も漏さず搦捕りそ後陣ふ在り先途と知〻ば一個も逃ふ出て馬前ふ跪く。
素ふ被れと喚れば道節呵々と冷笑ひて憨念入ふる長談義ふ今ゆ〻答んは大人ふ乳る

けれど慈心と釋ん与く听ね抑先亡追薦の念佛供養の願主る、大法師ハ安慈ホ。
素より名利の與ホらねど當城主へ訴て免許を請んとも。況這地の寺院ホ告く。帮
助と借りて何ホせん且冊愛して普く濟ふ施ゑ佛の慈悲るホ疑ふ所ハ弓箭採る
莫今番の法筵ハ和郎们ガ先君氏朝主の菩提ホも千りくれ飲るべ紙筋ホんホ罪ホる
ホ孫ホんゑ為ると詰れガ毛野も語を續て既ホ搦捕られと空く能化院の長老師弟い、大
識ホらねど善ホ與ホる心ホて昨今来會ホ者のみ那身ホ犯せる罪ホけれ逃
も解れ難ホ事ホ非道の索ホ被ら我们ホも一列ホ思れ後悔ホんとハ道郎
設聞り立て唯那十個の僧のとハ、大庵主も我黨も罪せらるゑ為ホ来意と
知まく欲ホ庵主の伴ホ立ぎて姑且和郎们と名ちるけ是ホの両個と誰と思ホ安
房の里見ホ由縁ホ八犬士のそガ中ホて余る者ホと知れる他ハ則犬阪毛野我ハ大山
道節ホ信ホ解ても听れぎハ弓箭採る身の常態ホて引ハ返ホ武士の意地本事と

ホせん爭何ぞと理り譴る両個の犬士の然ーも雄々ーに勢ホ素頼計較ホ逞ぶて侮
ると思ホも多勢と負ホて毫も猶豫せぎ噫砲兒们ガ喑ホ辯舌人ホ慈ホとも
若们ハ是里見の與ホ事と法會ホ假托て竊ホ當城の虚実ホ覘ホ情使ると言
語の端ホも顕れる兵毎ホ捕ぎと劇ホく隊勢と找れ群立散動て凡ホ張る猫も
釋氏も共侶ホ御誕ぶと喚り叫て競ホ蒐ると道節毛野両個の野兵も棒とりて打拂
うち拂ひ毫も寄せぎ薙倒も修煉ホ透間ホとるけれ寄隊ハヨヌホもホのかひる、いめ
噪ぐて逃ホも素頼ホれホ駭慌て道節毛野と射て仆さと思ホ前坪ホ量りて弓ホ箭
刺ホて弯絞る那時遲ー這時速ー後方ホ一個の犬士ホり両個の野兵ホ従て樹蔭と出る
聲高ホ根生野素頼ホ礼ホ八犬士の隨一人犬村大角ホ在り下馬ホて命ホ乞ハ
や。罵り喧ら白樫の棒ホて馬の後脚ホ撥刺哩托地と薙折けハ馬ハ一聲嘶ホ宛
屏風と倒ホ像く主共侶ホ俯累りて死活ハ知ぎ平張け。話分両頭。余程ホ

大角一棒人馬を倒


現八僧俗二虜を雪く
大角
現八

堅名衆司經稜い樹間ふ敵の旗ゑえる東の茂林へ推寄て肇て後方とろへれば。
鄭ふ定め人數ふたがひて従ふ隊兵ヨりけれども甚麽と訝りてその戈を問まく愚
程ふ堅削も亦走り来り端を定め找寄りて經稜ふ報るまう。鄭高ゆゑん勢のヨ寡を
定めて二ヶ一と宣ひし。兵毎ぶ呼誤て莊客們さへ法師武者さへヨりく従ひ来ふければ
三ヶ二ッを這隊よあり拙僧他們を喚返さんとて。躰て追蒐いしーふん馬の最早け
れば沼趕着ゥで這里ょ到まり不便ふぶうもあるねども。今領て還ぶば六日の菖蒲那
里の期ゆあひくかゝんゆの俗這頭の敵を捞りて。旗のミをぶゆのヨ人數ゆく根生野
主の後勤い勿論捕漏されて逃るゝ趕ふ好獲もそいゆ拙僧ゆん伴仕ゝんゆの誂ふ
儘せゆゆやと已ゞ怯を奎秘ゆ古も旋るや熟腊刷毛ゆ吐く巧言ゞ信容る。經稜
屢點頭て然ゞ這里ゆ返まり遅り我主意も其頭ふ過ゞ素頼小勢ふるぬといふも。
角一百個い隊兵ゆん且他ゞ武藝勇悍我と惴利們ふ伯仲も不覚の掙ゞもべくもあるねば。

那里のゆい心安り。先當要い這頭る敵の虚実を捞るふ有り。とゆ思へども爭何せん樵夫の
かゝふ路のミゆて敏ゆり柱る松柏の枝ゞ交叉処ゆるければ騎馬の進退難義るべ。御坊い先
鋒の頭人ゑれば勇僧まれ猛卒まれ五七名ゞ従へてゐけ入りて隈もるく。渉獵らば敵ゞ有
ゆ。知ゝん那奴們倘切所を負ゞて。盾籠ゞあるゆば驅出して戰ふとも。御坊們都て身
單ゆ功名ゞ貪らで陽走まり敵ふ趕ゞて。誰引出まを妙ゞせゆゆ美を衍ゆゆゞ心屬
ゆい堅削い好ゆゆゆ所ゆゑれども今ゆゆ推舜むゞゆゆゆ。ゆゆゆ答て躰ゆ退
ゆゆ心鬼相似る悪僧五六名ゞ伴ゞ。各持る眉尖刀ゆゞ去向鬱悒ゆ樹の枝ゞ極分ゆ
亦推抗ゆ敵ゞ案ゆて宸くも深ゆ森ふゞ入ゆる。恁而堅名經稜い隊勢を分ゆく。那
這る樹の艾陰ふ埋伏させて馬を駐めて堅削們ゆ敵ゞ惹寄まゆゞゆゆゆゆゆ。
まで影ゞふゆゆゆ且誂り且焦燥て只得馬ゆゆ下立ゆ。我みゞゆゆ渉獵んゞゆ。躰一置ゆ
隊兵を咸召ゆ。意見を示ゆて馬を牽ゆゆ前後ふ立ゆて。ゆ入る茂林い鳥路熊徑

苔滑ふ樹下潤くて辿るふ辿り易〻ぬを。左右して両二三町。歩めんと思ふ程ふ其頭ゑ樹の下ふ人あるて。後の方人々救ゑ助けよりと叫ぶゆを。経稜も隊兵も噫とだりふ咸駭ぬく。覩れば赤ゑ兜冑人るゑを。鄭ふ斥候ふ遣られる堅削並ふ同伴の法師武者さへ五六名藤蔓とゆを結枇られて。一個も漏れを。老樹の幹ふ縛ぎ者られてあり。ゆを。驚く経稜いちゑ。隊兵都て膽を潰して故を問ふあり。評まるあゑを。打揮ゑく聚合噪ぐと経稜急ふ叱禁めを。兵毋烏滸る口とる喈を。先那索を解捐よとられて大家阿と応て間近く立る隊兵ぬ腰ふ帯くる七首とるふく抜て。堅削ぬ。索を截ぬ。葉んと廿程ふ前後の樹蔭ふ敵あるて。吐と飛くる興の聲。谺ふ響ぬて。ヨ少と知るを。突然として顕れ出る。這里ゑ。三個の大士の武者聲。大川荘介ふ。大田小文五郎。飼現八。藝ふ在りて。名ふ在りと名告被る武威胆勇。その勢ふ後の駄兵ぬ。絶ふ四名ゑ過ぎれども。士卒一致の進退烈しく。面ふ顕れ背ふ靡けく。短兵急ふ拉ぐ。奮ふ男正ふ虎を。て羊と駈るふ異るゑ。ぬれば始よりて。鬨戦ふ心ゑ荘客ぬいまぬ

近くハ找まで。在りふ目今敵の興の聲と。呼くより呼々と。敬駕怕れて。辭を衝て逃るぬ。誰ぞ。駭慌さる。逸正寺の悪僧ぬ。ぬ〻。経稜ぬ。伴当列卒さへ。軍旅ゑ熟ざる者のゑを。敵の。ヨ少も。ゑ〻〻ぬ。皆只命を免れんと。樹間を潜り路と求めて。走るもあへも。樹の根ふ跌ぬ。或ハ背ふ躓く者ふ。壓倒され。蹂躙られて。剣三大士の駄兵ぬ。生拘るもヨ〻ぬ。開ぬ中ふ。経稜。走る。躬方と。詈辱して。復せ戻せと。喚ぬ。憶ぬも退後ると。現八横ざまふ衝と。寄て刃と丁と。打落ふ。組もゆを。中一中て。三間ゑ。ぬ。投るぬ。経稜ハ。老樹の株ふ膳と。打せ阿と叫びて。又起べもあらぬ。ぬ。大士の駄兵ぬ。走蒐りて。索と被て。牽居る。登時。荘介ふ。文吾も。現八ふ。今ふ。ぬ。拳法の精妙ゑを。感ふ賞て。倶ふ。経稜を責て。ふ。やとれ。鳥滸の小人。悔。かを。雨ふ結城ふ由緒ある家臣。親の忠義ゑ。賞として。重職。美禄を。高ふ。放辟邪侵ふ。理義を。思ふ。心術相似る。同僚の。佞人。根生野飛雁。太素。頼長城。椛之介。偏利と。共侶ふ。逸正寺の。住持。徳用。ゑ。徒弟。堅削ぬ。映誘されて。大庵。主。念佛供養。ゑ。非義

と媚て君命と偽倡へ僧俗烏合の多人數をして我们さへ推並て搦捕まく欲り一ぬるその計較の趣人の告るを知くるを今又悪僧堅削们の招てその詳るをと听ぬるを知ざる那悪僧们が與ふ斥候を漫ふ這頭に来よけるを我们既ふ摘捕て爾と久しく苦しめ今ふ及ぶども、大庵主の念佛供類ふ若们が先君先父の菩提ふも干れば相歎びて一臂の力を資んとテそなりぬべきを告ざりを罪として雙言敵の思ひを奪ふ抑何者の心ぞ忠ゆもあるを孝をも眞訓越ふ覬面るふ其身をの亡君亡父ふ欺て出ふ出るをるべやハ恁ても陳ずるより為ふ甚麽をいふたぶと迭代ふ責問へども經稜ハ折傷の痛楚ふ沿堪ざりけるを當下堅削们の悪僧ハ俱ふ蟬聲戰して犬士達とやうに允さをの我们を住持德用の指揮に依て已に之ぞ。當隊に加りひとも只懲さえとありひのを真実大人们を擊捕んと欲せ悪心いよ〳〵と勸解れば亦經稜の伴當列卒の生拘られも咸跪て額を衝て異口同様ふ陳るを哺刀祢们字召せ小可毎ハ這回の計較ふ意毛も干らを情由ぞふ知ざひ一を主命るれば是も亦非も亦相従て此〳〵賢太ふ倡ち口説くを三犬士ハ是もを〳〵杣木の株ふ尻を横て莊众が談るを天田大飼ハ思ひを堅削们が招ふ據るふ兇徒三方ふ向ひる事既ふ分明に只心許ふ大庵主の安危を供養塔所ふ快立かを大山犬阪犬村们と一隊ふ做て庵主の跡を赴て大塚ふ力を勸せ今の急務ハ只是のみとハ小文吾點頭てそを勿論の事〳〵這生口们をいふまでを何を現八字あるを并も商議ふ及ぶを一個々々ふ首を刎て後安くせをもあるべ逃る奴们が分り来て被る素を解んぞを然でハ盗ふ糧を齎し仇ふ刃を借まを似て是禍を貽をもの義を思ひをを〳〵と勇むを莊人推禁めて否如右せんハ易けれども、大庵主ふ為られ〳〵ふ灰ふ吹犬江親兵衛ハ逆將素藤を征て折兇徒を一個も殺さをを全勝の大功あり然るを這生拘们を殺さを庵主の諭ふ違ん但經稜を悪僧们をの供養塔所ふ牽のそを犬山犬阪犬村们ふ示て衆議ふ儘〳〵べ〳〵其術もあんかと諭せを現八感服してその議是ふ精

番の約束今番の闘戰他們が奸忠の奸虐あり我よ
り殺さば他們が主君なる結城氏と怨と結ん然ては里見殿のため為宜しからぬと思いざらんに我な
ら短慮なり嗚呼衍ずんと諍返しつゝ他事なければ莊介小文吾再議に及ばず西個の野兵は
ちろ泊さをそ經稜堅削們の生口と牽立てそいそぐまるに經稜い撲傷に惱て一歩も運び
ぬぞ堅削も亦生拘られ折片足を折たる故に立ぞる輒くぞといへば鄙に經稜が牽せる馬
も既に分捕せられ繫て樹下にあるとして隨即件の僧俗とその馬ども共に兼せて鞍に勝附る
ども莊介們いれをそ二度野兵に下知せ番うその餘の生口ヨヲれども皆泛々の雜兵なれば
仍ほして無てもん但那仍に閑くまじたい鄙に樹間に植さそる涅槃偈の旛へけつをもく採卸
を燔棄よとの野兵們ちろそ伐のごくに做しに有徒しば莊介小文吾現八と經稜
堅削とちら無せる馬を真先にあるませてその餘生口の悪僧と野兵に牽せ路といそぐそ
塔所の茂林に分の来ける程に道節毛野大角い根生野飛雁太素頼とその隊の僧俗殺名

狩まく生拘られけるに茂林の樹の幹に繋て莊介們の三犬士に対をきく第ろ在りしに迭に
聞戰の趣と箇様々々と解示して倶に笑局に入りける所に道節が申ふ假討なる
頭人なる素頼と經稜い大村大飼に生拘られて這頭に敵に似れども生拘毎と拷問して
他們が密策と所ある尚一隊の兇徒あり。庵主と搦捕んとそ中途に埋伏あるとへば曾安
ちろぞる所あり。和殿們その美を雪ぐそと急迫しく問へ莊介答て然ばとよそのあられ我們も亦
堅削が首伏そ既に知れり。然ども他們を誅戮せでその処まで牽ゆて来ぬへ大庵主の教を
守りて衆議に任せんと思へるにとふまに小文吾現八も亦云云と解示もそ毛野い倩ち所て那隊の
頭人長城枕之介惣利い經稜素頼と同ドかゝで一百名の野兵あり是に加る逸足寺の住
持徳用い出家に似げ武藝に長て膂力飽まで剛ろと雖ども侮り難に惣利い隊
兵に持しる准備の神器将軍ヨヲろと生口毎に招ふとそれを思ふ実に是勁敵之大塚
素とろ智勇に秀て敵に敵ふ足るとにとも失ずとまべ又那星額長老師弟い鄙に

素頼に撞見して搦捕られしと聞えしかバ剛才躬方の夥兵を率て其頭を曲るく索させしに。
那里へ牽れけんかしらずといふ。事の理る折もあれバ這宗徒の生口と那十個の法師達と交日勿に
便り宜しからバ。然らでも武威を示さん為に素頼経稜堅削們悪僧ハ殊更に頭立たるを
許せとて。那里まで牽もて来て犬塚蚕崎姥雪に力を勠して庵主を守護せん皆
立ぬへといそげバ大角一番時と推禁めて郷高に咱們が馬共侶に雑浪しく生拘たる那根生
野素頼ハ馬に布れし折より腰立ず。その馬も亦後脚痺て牽もてもくに不便なり。経稜堅
削と共侶に孤馬ぶちら駆せんとぞに大家異議もなく夥兵にもて吩咐て素頼を亦合鞍に
騰け駆して牽出せる。その為体をうちみれバ俗にいふ三親荒神の輕尻なるや。草枕旅路
ハそぞろ六犬士ハ去向甚麽と安からぬなれど武井の驛路投て人めかならぬ杖原其里欲と
もよし捷徑を求めて倶にいそぎけり。誠や時運に厚薄あり。事に幸あり不幸あり。大に
倶しぬる信乃們の安危ハ下の回に具なるべし。

第百五十七回　大庵の厄に親兵衛伴を喪ふ
石菩薩の前に信乃應報を悟る

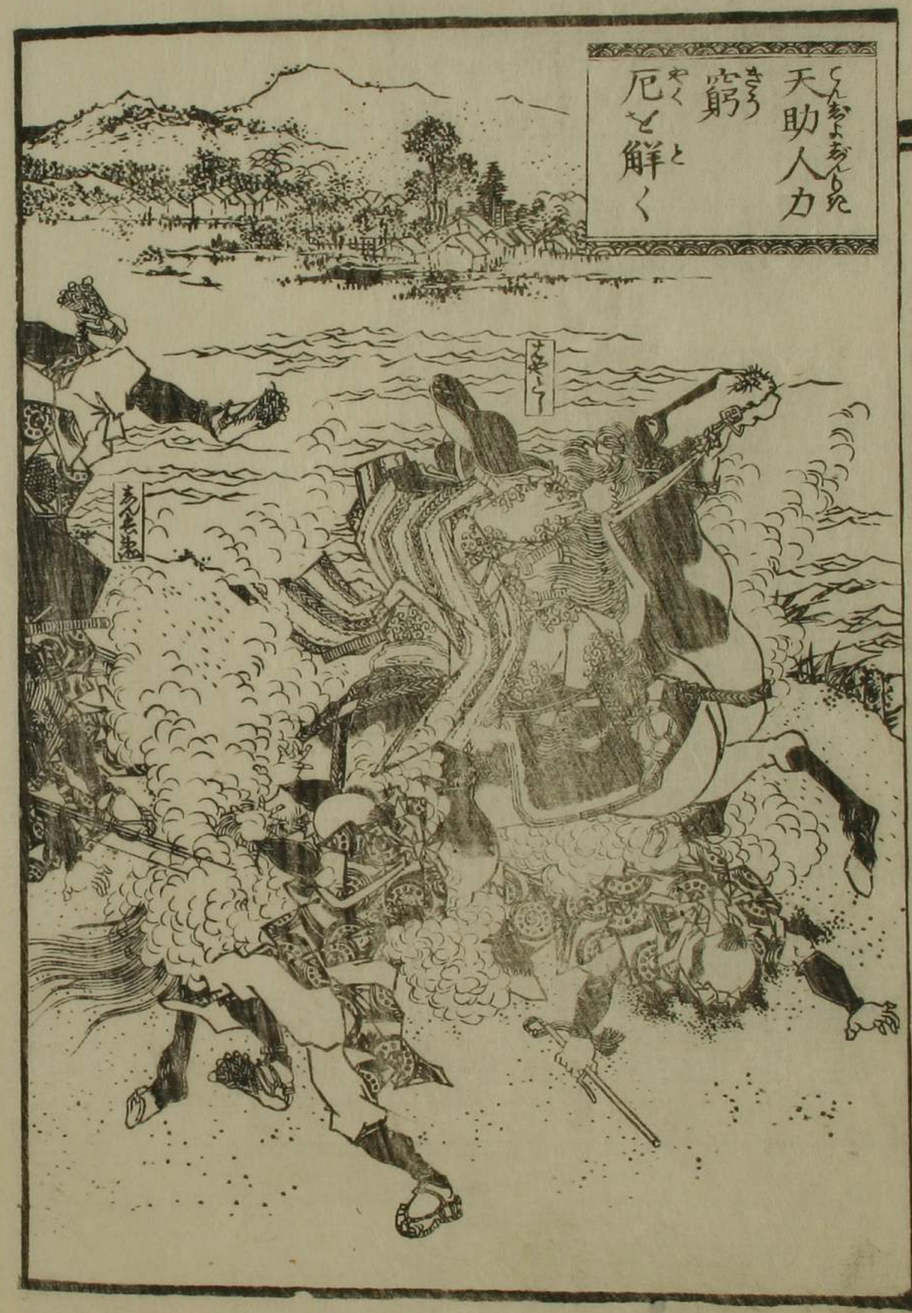
單表犬塚信乃戍孝ハ道節毛野荘介小文吾現八大角們の六犬士に先たちて蚕崎主僕姥雪代
四郎們と共侶に、大法師に相従ひて上總路を投てハいそぐ程に。既に結城の町を離れてゆくこと一里半あまり武
井の驛をうち過て杖を諸川の方に曳く程に當時ハ這頭に岐川ありて。その一川ハ許我川俣へ相沃ぎ。又
一川ハ仁連木家部堺に迫りて倶に利根河に合流せり。さるをもて土俗是を左右川と喚做せり。今ハ
這川ありとしもなけれバ看官詳り思ふもあらん。遮莫水路の同じからぬ今とそその昔の録とても做になし。
船に契らして渉ることし。劍を求るに異ならん陵墓鋤れて田となるあり。蒼田没して海に做る世代の轉変なるを
べし。然れバ這左右川の分る処に長五六間許なる圯橋ありける。関宿より流に溯て結城の城下へ来る者ハ必
この橋を渡るなるべし。間話休題。却説信乃照文代四郎ハ九個の伴當と共侶に、大法師の前後に立
ちて武井の驛をうち過て左右川の上に来ける程に小塘堤に植たる並樹の間より居ヌの隊勢を從へて走

アヤ出来る騎馬の武士是則別人ゐるを長城枕之助惣利去向をくを殺塞ぐその隊の雑兵六七十名御誕々々と喚て各々々を振晃めも十ゐの電光目を射る如く前後を争ふ緝捕の勢ひ猛くゐ
ぢるふゐ〻ぐれば、大法師の先ふ立る照文も代四郎も今倒は一言半句の問答も暇もなくゐを何事ぞと
だゐふ組しへせと相挑む修煉の掙ぢ劣らぬ優さに投退さ〻防げども捕隊ハ然へも岌より蒐るヨヌ人
数ゐれ物ともせぬ然ハ照文が若黨紀二六並ふ八個の伴當ハ怯れゐふゐるとも武勇捷れ者ゐねば
防ぐ難く捷伏なられて迭ゐく搦捕られけるぞ中ふ、大法師ハ駝なり一季基主の迭骨を失ひと
のゝ心ふ拭て聲も乱れぬ降魔の経文誦拭ゐ錫杖を防ぐ甲斐ある武藝の妙要昔の餘波著
れて亮も透間ゐぐれば敵の雑兵々闘ゐのゝ輒く捕もるざやを惣利馬上ふ焦燥て罵ゐ又励ゐ連
アふ隊勢を找ゐける有徳ゐ程ふ犬塚信乃ハ趕ゐる敵のゐゐるをせんと豫思べ由断せぬ、大法師と
相距ると約一町許ゐて殿ゐゐ来ふける恵ハ後ふゐをゐて緝捕の勁敵前ふゐ一騎の頭人居ヨヌの
雑兵们、大代四郎照文主僕を推捕稠て闘ゐを。ゐるとハゐも慌ゐ謀ぶゐを心ゐ恵ゐ。那奴们ハ豫

ゐく結城の三士の一人を逸足寺の住持を帯助る乱妨ふ及ぐゐん先那騎馬の頭人を撃仆ゐ
殘兵々戰ぎと退け易ゐと勝屑を揃る武畧の即智ふアゐ路の傍ゐる舊稲塚の小杉木を泉究
竟と拔合て腋挾ゐ奮然と走り向んとせゐ程もゐゐ這里ふも樹蔭ふ又敵ゐて顯れゐる法師
武者その勢約莫一百許の内中ふ一個の隊長ゐ問でもゐゐ這ハ是逸足寺の住持徳用ゐ括袖法
衣ふ袈裟頭巾尚已時可ゐ白ぢ夾衣の下ふ身甲を鐵の鹿杖の重六十五斤ゐを突立々々先ふ找て
隊勢と倶ふ失々と去向の路を断塞ぢ信乃と伝と疾視て四下ふ响く聲も尖鋭く若们大胆烏滸の
鑑慈見事を法會ふ假托て當城の虚実を闚ひ恩を窮民ふ施して這地ふ住り我寺を傾けと欲ー
ゐ仮倆を誰ゐ知ざゐ囮守の輿ふ奸賊を當寺の為ふ法敵ゐの故ふ我忍辱の鎧を脱て弥陀ゐ剥
川ふ異ゐゐ恩這鹿杖を携ゐ只一打ふ徃生さん噫法師们ゐ温ーゐぬー大刀佩ゐを憚ゐ猶
宙ふ吊ーとゐて来ぢと喚ゐ嗜れゐその隊の悪僧道人を共侶ふ或ハ眉尖刀捍棒を打振々々競ひ
蒐ゐ信乃ハ准備の小杉木を打拂々々先ふ找ー一両僧を左右撑と撃仆せば怯むを隙ふ聲

高呂ふ若们破戒を慙の兇僧一個の敵と侮りて安房の里見の大士の一人大塚信乃とまぐ知ぬ本事とこんをんとのなも果を替る二の隊の悪僧们ゞ入む眉尖刀ふ身と淪しく両膝撲地難倒も武士勢精妙思ふ優く所神出鬼没の挿ふ悪僧们を皆舌と掉を又立替る新隊いあて逡巡を恐るのこと能ふ徳用怺を鐵の鹿杖両手食揚て輪々々と両三番振試ゝ麁粉ふ做さんと走り蒐れば信乃ハ透さず身を反て小杉木よりそ丁々礮と受ハ流しつ相挑めども器械相応しく所れ看官越す胸安らそ勝負誰何と思ふもあえ知ぬ信乃ハ懐あハ那孝の字ハ天王ふ然でも自得の武藝精妙毫も透間あくまれば徳用憶を腕乱れて心悄地ふ驚げども猶も撓ず踏入きゝ嘯を叫び戦ふる事の光景目覚しく雙龍深淵ふ珠を爭ふ両虎高岳ふ夫を欲るも倭を思ふ可きれば全隊の悪僧道人们ふ呆れて倶ふ長視て在り然ハ又左右川の邊ふ照文代四郎居ヨヲの敵と防ぎ難く共侶ふ只得刀を引抜て殺拂々々一霎時ハ挑戦ども惴利連ふ隊勢と找ぬ息とも類ず攻くられければ照文も代四郎も竟ふ勢ハ窮りそ代四郎ハ跌顛ふ照文も亦敵の干ふ刃と丁と打落されてひらく捕捕

らるゝとゝるふ不娯しく、大法師ハ左右の帮助と喪ひて防ぐふ術のあらぬれば亦倒ふ敵と拒まで親を外他事ふりし暇兵们ハ為ふと左右ふ抗ゝ凋つく組ばれば惴利馬上ふ雀躍して其奴綾ゆるも足も結却ぬくと下知ふけり嗚呼憐むべし二十餘年科藪行脚の勇僧も時運好らそ暴戻奸許の這禍鬼を禳ふもあ人ぬ嗟嘆ふ方ふりけり浩処ふ犬江親兵衛ハ政木孝嗣と石亀屋次圓太郎三を伴ふ五十三太素ふ吉ふ送られる水行を今日ハ関宿より陸ふ登り路次と急ぎて孝嗣们ふ先ちと約莫一町許ふ来て目今這里ふ来ふけるぞこれば左右川の那方ふて旅客きん。三個の僧俗緝捕の暇兵と戰ふ員て既ふ搦捕らるゝ中その旅客主僕の内中両個ハ是武士ふて紛ふべくもあらぬ照文と代四郎ふりければ原来法師ハ問でもあるぬ、大大徳ふてあらめと驚ぬ思ふ意外の邂逅際ふ寄とられ殺左右川橋を飛ぶ像くふ渡り来つ怒ふ堪ぬ聲高ふ孩を呼人々ふと止めよ事具ふ知らねども同心藩の情朋友の義ふそ安ふ已ん兵毎ふ大士の一人里見の家臣大江親兵衛仁義ぶと名告も果ず鐵扇を惴利ふ馬の尻と力ふ来して托地と撻ふ撻れて驚く馬ハ只狂走れる勢ハ駐らぎ主共侶ふ左右川の渊へ



○文政堂藏

水と陥りけり。親兵衛これを見るに驚き譟ぐ敵の夥兵を又鐵扇もて毆伏せ或ハ蹴倒し撻抓を。
飛礫に拿て擲る折から後れて來ぬる孝嗣次團太郎等共侶に事ありけりとてそれより驚く甲乙
齊一走りて渡る左右川の橋の中央に迨る程前面の岸なる數叢陰より連放る鐵砲の箭嚮と共に孝
嗣們も右も倶に撲と擊れて陥て経方ハ急湍の水に推流されし狹淪を挾在りと共に見えずなりけり。
原なる這數十挺の鐵砲ハ是別人の所為ならず。惴利豫夥兵を分ちて二千人も鐵砲を持して數叢陰に
伏置きし一艦砬兒們倘悍ぐそれに餘るるもあらべく擊を什ねと下知あれバ然バその二千個の夥兵們ハ思ひかけね
從ひ一個の少年が諸川の方より走り來て矢庭に頭人惴利を人馬共侶撻走らりて川へ陥しのミなる躬
方の夥兵を投石に拿て人ゑ境に入る如き武勇に當るべくもあらざるに他が一路見ゆあらん主僕とみえる武
士三名那少年に些し後れて走りて川の前面より突然として來ければ這數叢陰なる伏兵ゑ趣と見寃と
うちて一隊ハ把橋を渡り來ぬる三個の敵を殺と陥し一隊ハ少年を殺さんとて十四五挺の銃頭を
其方へ推向て一度に鑽て放ちしに伏姫神の擁護ある憑りけん親兵衛ハ大の身ならず捕へ擒られて這

里にある照文主僕代四郎們ハその鉄丸毫も中らずして皆他們が火家の親兵衛と戰ふ者
のみなれバ死を免れし驚呆れて群なる鼠の逃るが像く一個も在らず做りしかバ伏兵も慌且恥て又遽しく
丸を篭て復親兵衛們を擊んと志得る折しも忽然と勃風猛可に吹起りて最凄じく那伏兵們
鐵砲の火索を都て風に合せられて又擊べくもあらず天さへ曇る塵霾に黒白も別ざりしかバ伏兵
們ハ驚譟ぎて吹倒されど四下なる竹に推寄りてありけるに數叢陰に年歴たる槐欟の倒るるに撲れて矢
庭に死する者五七名なりけれバ大家沿堪ず慌迷ひて立去んとせし程に最闇ければ迷ひて川の邊へ塗
來る憶ず風に吹滾され齊一急湍に陥りて浮つ沈つ流れけん這頭に敵ハあらざりけり。尒程に親
兵衛ハ後れて來ぬる三個の同行孝嗣次團太郎ハ方僮左右川橋の中央まで憐むべし敵の鐵砲に擊れし
水に陥りける其光景を見ると見ども事急なれバ極に由なく剩我身も敵の銃頭に見るべくもあらざりの
者に反て他們ハ同士擊して躬方の洪福にならしのみならず勃風猛可に吹起りて塵霾天を翳め一霎
時野干主の烏夜になりしかバ敵の伏兵慌迷ひて走りて河に水に陥りけん其頭に水音高く聞えて居ける

人の呼とゞろふ叫ぶ聲あそけるゞ小後ハ音もせぬ寂ふ奇ゝ紀天助るゝ猶幸ひゝ疾風烈ゝけれども親兵衛その餘も貶方の身邊を避て吹け中らゞ吹倒さる患ひあるぞ呂孝嗣们を悼ミ思ハ哀歌交分くよりもゞ惆然とて在りける程ふ勁風恬ぐ塵霾霾霽て青天白日明亮ゝ登時親兵衛聲とかけて啓よ蜑崎主殿雪更ひて恙ゝと問ゝ躰て首とりて蜑崎主殿代四郎ゞ獄られる系を截棄れば大家狡ぞ弔ふ照文と代四郎ハ敵の夥兵ふ打滅される両刀を食ふ抗牆ふ跨て感涙の找むとゞ叶ふ折ゝ大江生殺れるゝ神所為狡再生の恩奇ゝて姉と倍ふ那果在ゝ大庵主ゝとゞ親兵衛ゝ礼を守めぞ遽ゝく、大の身邊ふ找ゝ朝ゝ跪ゝて師父ゝ晩生則大江親兵衛仁ゝ十歳ふ四歳の時舊里近ゝ行徳ゝ死目ふ遭ゝて面ゝ忘れ難ゝ亟ゝ丁寧ふ陪話ふけゝ這時ゝ大ゝ料ふ問ゝ親兵衛ゝ帮助ゝ身ハ勍敵の系ふ被ゝ且風雲の天変ゝ最大暗ゝ時敵ゝ夥兵ふ打墮されゝ錫杖ゝ撥拂ゝ答ゝ笈ゝ搭駝ゝ隨ゝて端然ゝ立在ゝふ今親兵衛ゝ名告ゝ聴て

左見右顧ゝ感涙の找むゝ覚ゝ領ゝて詞徐ふ答ゝ絶て久ゝ紀再會の由斐ゝて今の辭鬼ゝ對治ゝ武勇人柄正ふ是和殿ゝ異ゝ支問ふゞ也ゝ勍敵去ゝ風雲散ゝ低ハ洪ふ恙ゝ紀對面何事狡ゝ優ゝ紀却自餘の義兄弟七大士ふ先ゝ君侯御父子ふ拜見の始ゝ大功ゝ事の顛末ゝ月両國河の邊ゝ憶ゝ蜑崎生ふ君命ゝ依ゝ反賊葛田素藤ゝ再征の爲ふ田税逸時廿日屋景能並ふ五十二大素ふ吉ゝ共ゝ伴ゝ舟路ゝ總ハ却ゝ再征の功ゝ成て目今来會ゝ親兵衛然ハ既ふ猜ゝ錯ゝ素藤對治の守功ハ逆時景能孝嗣次國太鄭三们の帮助ゝ又討隊の大將芒川老の陣営ふ謀ゝ合ゝ御方の勇戦一致の故ゝ然ハ素藤姉椿ハ宗徒の兇賊送ゝ或ハ生拘ゝ或ハ誅ゝ館山平治ゝ猶一椿事の先命ゝ自餘七個の義兄弟ゝ密ゝ途ふ迎ゝ蜑崎生ふ面會ゝ這地の法延ふ

までの餘時あれかしと思ひ給心頻りにおそれて安く館山を辭し去り孝嗣次圓太郎三と伴ひ今日已
牌過る時候船関宿に果てゝ送られる五十天们は相別れて陸に登り路次とはそれ剛才這里は未だ
ゆる橋とりそれべゝ身並に蜑崎主僕蛟雪们に急難あり敵は誰あるかあれ餓を給奴さるべく聊
孤力を盡すに猶風雲の天助ありて思ひの隨に各位を救ひ得るに就て最遺憾は孝嗣次圓
太郎三が横死と我出殊に早くけん他们は後れて來ける程に數蔭る敵の鐵砲に數られて川に陷ち入
散も留まりかけ今の數は是事のまとに蜑崎主と
渡し齊一嘆息をうけ姑且と代四郎は親兵衛ふたり向ひて南和子老僕もに過る日に蜑崎主と
折ふし使と奉りて孤力を身の舊里に市河へと乘走るその事は趣は及せ申けん風
波の障りあるとも身が那里とも去りぬ後に大江屋へ尋ね本意を遂ぐ這地に來て蜑崎
主に對面の折ふし身の往方も那人の忠孝義俠を問知りて憑く思ひ政木生石亀屋们も這
里まで來て敵の為に可惜命を隕されは現痛

我们路次とて諸川を過る折前面より來る一個の法師が咱们をヤと喚住めて和君達は今日大
庵の念佛供類に會んとて結城へ赴くなるべし件の庵主今徒々の地方も一路児と
共侶に免れ難しかるその故は箇様々々徒々の情由ありとて庵主の宿願成就の星頭長
老師弟の及先君李基朝臣の遺骨の又施紗の折に來ける乞丐法師が忠告の支の趣逆足
寺の住持徳用その徒弟堅削们が悪心邪説と邦助る結城の驕臣經稜素頼惣利们が詭
詐の緝捕の又大山大阪大飼大川大田大村の義兄弟は塔所の茂林邊に猶在りて二隊に別れて敵と
為らるる又大塚は蜑崎蛟雪们の幇助とて庵主に俱して塔所の茂林に立去りぬ其の餘念佛
供養の光景蛟雪更に故主の隨意與四郎の與を改めて代四郎與保と喚るとまで漏さで具に告
らる言約めて諱らねば時と移さで吁果ける虚実は知む怪くも胸安らねば件の法師に出処を問賀ふに
追ふらばいそぐ伏に立別れ飛ぶ像くに走りまでそれば果して那言錯に更逢主僕は捕られて庵主
も危窮の折ふれば宅も礙話せば踏入て聊孤力と盡ふ敵は火銃の准備れば防ぐもあらじ

来奇しき風雲の帮助によりて同士數させて。彼方に利あり。遂に怨敵退散せり。皆悉く幸ひ是晩生が功にあらず庵主の道徳高けれが佛菩薩の利益なり。然るに亦守護神の冥助なり。然らば送骨と馳れの先君威霊の擁護なり。怪しき奇特なり。孝嗣次園太郎三の。果敢く敵に誅されへ命數尽に竭き故欲他の忠孝義侠にて身を禍鬼に喪れ因果と佛説に據て思惟れば前世の業報なるべし。左も右もと惜けれと唱言なり。鮮血を听て呆て照文代四郎告て豫思ひ。奇く親兵衛に知られて他よりいつく當意即妙そのことなるに付。姑且て照文代四郎是も亦大江生に知れ狡知れば卑職の地に折。大庵とたび難。殆困たりけるに奇しき法師に案内せられて面會の本意を遂ぬ。刹亦星額師弟の石塔婆の奇工なり。乞丐法師の思告あり是に由て彼と思ふ和殿に先機を告て法師に權者の化現なるべし狡と憑くいとへば代四郎もうち黙頭て。俱に感嘆きりける。這時、大八爰も卸さぬ朽樹の伐株に尻を横へ。件の奇談に雪果く親兵衛に向いて。なう。妙なる這那一致の善報。凡智なれ。怪りかさけれども那政木生とは。善人

三個の為命に実に和殿のいる如く過世の業因なるべしと思ひ絶えも絶せず。第心許なれば大塚の安危と那人の始より。趕来る敵のありのやせんと思慮りの。一町許。胡意後れて来ける程。這里に動敵の起り。折大塚も亦一百ばかりの悪僧ども路を断れ。力戦の光景に聞遠くもあらざれば。拷僧ども。とてこれを知れり。あらば風雲の奇異にして猛可に暗くあり。折大塚に何とか考へ。今又なる那里に敵も那人もあらばなる。宜塔所の茂林に敵と。なる大尖川六大士の勝敗いまだ知べからざるの事を思ひのあまりと。問へば照文代四郎も然也と黙頭て。現大塚の上にも我ども亦心に掛れ。大江和君に商量なり。指揮據んとありけれども要談まゆく。言後れなりとなを親兵衛なりてその美に庵主も畏遠も然まに配慮ゆえ大塚に那孝嗣次園太郎三们と同じくらむ。身をとるさでは天王あれば捕捕らるべくもあらざるに思へども。開ば儘に見捨て那里ちいるに晩生に悪衆徒に認られざるに幸ひ。那里までも赴て大塚並に餘の六大士の安危を尋ね。勤に共倍に行て来て。畏連庵主に倶して諸川まで退くに這里に人煙遠られども結城へ入る者出る者の必據なるべ要路をんに今まで徂徠の人多に風雲の間を怕れ。欲然らざるに亦神明佛陀の禁ゆえ。

然ばとて虚々と這里に長談もすべきならねバ。且よしやとて照文代四郎頭を掉て。そハおくれたり。われ犬田犬飼犬塚を除くの外和君に對面せざる大士六迭に面善るべくもあらねバ。然バ犬田ハ和君の小父でも犬塚犬飼ハ相識でもそも面志れざるらん何を所據に名告あへべき。只我們も倶にゆくべきとかれて親兵衛沈吟ぜ然とても両個ハ要なき姥雪世丸と伴ふべし。枉てこの議に任しね。今先犬べきものそれともかく聴て身を起して走りて圯橋の中央に追りて水中を見る左右の水際を両三番見亘して故の処にかへり來つ。然而、大照文代四郎們に報ていふ。晩生那里に赴きて捻めても限もなかりしに荅蔽次團太郷三們ハ急端の為に流されけん屍骸ハ孰も見えざりき又前面に晩生に馬の尻を擲驚されて來つる人馬共侶に川に陷りし敵の頭人ハ則結城の家臣にて長城枕之介惴利とか喚做奴なるらん。那奇しき法師に听えたる那奴も馬さへえ止得ず那惴利のミならず慌て怒風に吹渉されて一度に川へ陷たるんと猜し思ふ那伏兵們も川下より逃たる歟推流され歟在らざる歟侍ば後安からで犬蝦主ハ伴當を將て庵主と倶に這川邊を去ぬといそがしく折から登然と結城の方より人居ヨ茲迫方を投て來ぬ敵狹とみれバ正に是七犬の毎にて信乃ハ既に德用を生捕て貝方の縣兵に索を執らして真先に在を牽して。丈

道節毛野大角荘介現八小文吾ハ素頼經稜堅削を一馬に勝乗せて。その宅生拘の僧俗をも亦七個の毀兵士に牽せて聚ひ來にける光景ハ天部の善神戰克て阿修羅を降すの勢ひも信にと思ふ照文ハ見ぐも且抗けうち招きて喃犬塚主。大士達も聞しめせ我們ハ衝に這地方にて大敵防ぐに勢ひ窮りて主僕共侶に擒と捕られ庵主も免れがたかりしに料ざりき來にける犬江生に拯れて勍敵退散せりと只顧ふて悍りも見喚聲の高くなるに自然の勢ひなるらんと思ふ親兵衛ハ立て身を起して。代四郎と紀二六が後に跟くとなく先だちて走り五十歩許出迎て小父公ハ孰にいぞ犬塚犬飼自餘の賢兄晩生則犬江親兵衛仁にぞ候へと名告るを坐るも小文吾信乃現八を第一番に荘介道節毛野大角も亦親兵衛に近づきて各大八歟ともよりて思ひよらも大人備に逋男になりけるよ。酒家ハ小父小文吾咱們ハ信乃現八と七個名告る不勝の喜び背を拊ち顏を目戍る親しき疎き隔なく皆骨肉の思ひあり具に名狀きべからず代四郎ハ含笑みて照文の若黨紀二六們と倶に跪きて傍に在り鳴呼時なる哉至れる哉八犬士に具足して八行の玉聯串の功、大の宿望虐しからぬと看官も識るべく作者ハ二十餘年の腹稿この機を發く小團圓あるでもあるか一朝の筆なくざると思ふべし間話休題

時ゝ大照文も七大士と相迎へて親兵衛が故尼の戰功と風雲天助の崖略と箇樣々々と告知て鮑カニ所の勝利を同ふ遺節莊介先登の手ゝ豫相謀ゝ如く我们ハ那茂林を毛野大角現ハ小文吾と二隊ふ別れて緝捕の士卒と駢る走ゝ小文吾現ハを惡僧堅削と毀者經稜を生拘り受大角ハ根生野素頼を虜ふ走りる其奴们ハ足を損れて歩くべもあらぬ所ゝ分捕をする經稜が馬あるとして件の三虜と二鞍ふ縢附て。

牽きあふ來ぬる之の餘の生口も法師武者ハ殺伐破戒の罪許ぎ〻ず又經稜素頼が家僕ども〻ハ饒さまで〻蓋めて來ぬるその它浪々の奴们ハ両所の茂林の樹の幹ふ結紐着さる俄ゆて皆ゝ棄ゝ從豫庵主の教訓あれば一個も敵と殺さでゝふ却憐むべきの星額長老師第子事の始ふ寄隊の士卒と和解て巻事ふ扱んとそ漫ふ走ぬるを素頼が理不盡一個も漏さを搦捕らゝて後陣ふ退けるとぞ〻ハ鬪戰果ハ鮑方の夥兵ふ其頭と隈なく索さゝ那里へ〻奉と曳ゝ往方ハ知れざるゆ故ふ這生口们を那長老師弟と交易の為ものと思へと却這里へも前後ふ敵ゆて戰ハ難ぎ〻ゝ折天の資助ゝ風雲ゆと聞くゝ有けるゝハ大塚ふ着て胸安〻ざりゝふ忘ゆまさで芽出さゝと祝ぎ現ハ小文吾と毛野大角も亦云云と喜び舞ふ當下、大照文ハ星額師弟とあれ〻て且八犬平名の功を賞め這里ゝる敵ハ同士駢るをけ事を告知ゝれ信乃ハ亦、大照文ふ告ゝる〻ゝ嚮ふ咱们ハ惡僧毎ふ路を斷れて今期ぎれハ庵主の先途を救ふ進ゆゝ戰ハ夾ゝ一時候怪ゝ風ふ兵別れて後ふ德用と生拘ゆ折ゝ遺兵兄弟们ハ勝軍を。退ぬるゆ逢ひ事ハ首尾ゝ〻且ゆ地方の路傍小堂ゆ今昔未曾有の奇異ゆ思と合まるゆ有れ〻告ゝ知ゝ〻ゝ

恁立聚ゝて時を移さゝ城ゝ討隊の大勢を蒐ゝ〻ゝ折防ふ便の宜ゝ〻ゝ先諸川の方ハ退ぬて便宜の地方ふ敵と〻ゝ遺節找を寄てその妻宜取ゝ〻ゝ城ゝ討隊の追來ゝ〻ゝ惡僧俗们ハ非法邪計を詳ふ解ふ曰く我们素ゝ罪ゝ〻ゝと告ゝるとも聽れ〻ゝ先聖祭祀ふ生口毎の首駢ゝ落ゝて寄隊と破ゝ今更別說ゝ〻ゝ惱ゝ〻ゝ毛野ハ椎禁めて开も亦時宜ふ由ゝ〻ゝ咱们ゆ亦賢兄達ふ告ゝ〻ゝ一路兄の薄命の歎をありとゝ〻ゝ今の忘恩ハ再說の折ゝ餘談と盡さん。

這里ゝ要ゝ卒々とゝふ大家異說ゝ〻ゝ八犬照文代四郎ハ駢兵伴當共侶ハ大法師の先ふ立ち後ふ跟ゝ生口毎ゝ追立々々左右川橋を渡りゝ〻その路ゝ莊介と照文ハ羊來疎遠の親族を小文吾と親兵衛ゝ外

威の小父猶子なれば那と這とは肩を比べ悄然と舊ふるを談るも樂しかり。然ば左右川橋の那方なる田圃と畊も荘客們は這光景を遥に視て驚怕れざるはなく途を紛ふ土民旅客も亦逃隠れて遮禁なる者なければ八犬士は十二分に隊伍を整へ威風を耀らして徐歩もくと半里許とこれば路の傍に一町ばかり引入れる並樹のもとに前面に故くなる三門聳えたり。登時毛野は遽しく先に立て道節荘介小文吾現八を喚住め各這頭に憩へるに那舊院とこそ見なされる道節們は一議及ぶ信乃大角親兵衛、大賢文代四郎なる逆あり毛野の意見を聚めて大家なるべしと応じ。照文隨即伴若黒を直塚紀二に吩咐て那里の光景を見て来よとそいふ。立て遣ふ姑且しばらく來。照文並ぶ犬士們に告るは小司那里へ赴て隈なく検あらんと昔ある伝大刹なりけん今現る所は荒果て草茸々たる処々に柱礎の遺れるのみ。遮莫庫裏は猶これなり。井も荒れ落て雨はゆ〻し月も漏るく白壁壊れて骨の顕れる処蟻も形る窓に似たり然ば柱斜に庇傾く。賓子は朽て燕子花咲八橋と疑る徒れ守る者はなし但庫裏の背のみ稍小なる白屋あり其首は半ば六十許なる一個の法師が柱に背を凭けて打恥て在り。山門寺號を問んと思ひて走り喚覚しけれ熟睡

あるを驚児を挽応せざれば術もなく走りかへりて報ると照文は聞て具犬士們の意見を問ふに異議あるべきもあらず。然ば卒とぶらふに連立て大家に入り邊に迫る柱礎傾れば雖推々門扇閉ぢ得開門の頼れる処なく潜り入る。現紀二はいかゞと寂寞る廢院昔の餘波礎のみ苔々たる夏草の裡より驚鳥立て告天子の雲に入る。青葱たる新樹の蔭に郭公鳥の聲高く啼て然ば苔生たる石の水盤庚午に施主の連名と殘し笠を喪ひ露佛像は膝に茨の花開て鍼の如く跌坐あるは是なる。鼯鼠の栖に做る埋井に隣る孤の塚あり。正面に仏仁乱離の災に遇ぬ。嘉吉の兵燹に立る七堂伽藍亡あり。兵烏の蕃共百況石上に兎の足跡多かり。

とぶべしと思ふ八犬士は大賢文代四郎と共伴に立聚り。これを視る程に毛野は紀二を安内して庫裏に背ふ。ありと見る白屋に立て検るに在りと呼る一個の法師は那里に影もなく其頭に立る石地蔵の水盤の左右に隅に塩と土器に杉形に荘衣るあり。這石菩薩は罪に詣る人ある歟然らば那法師の供へなるべしと猜まる。

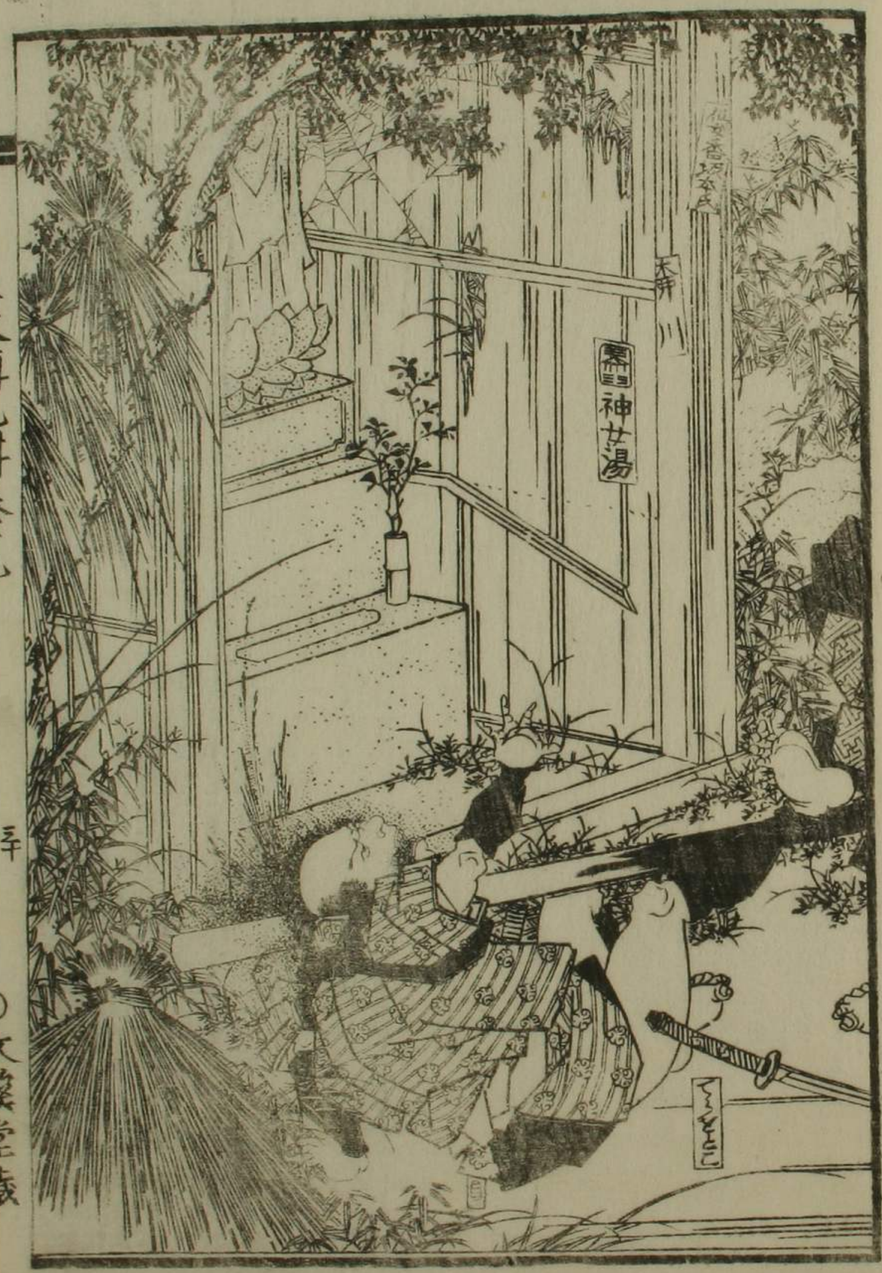
のこ人在ばいかゞ由なし。又這白屋の前面に大なる竹叢あり。折ふし壊れ事に坐する笛竹の或は二三寸或は四五寸なるもまく〻ありけり。毛野は那法師のかたに来りて一雲時白屋の檐下に立在りけれども既に傾け

又紀二天を朱に立て。庫裏の邊に寄せる折七大士い、大照文代四郎と倶に裡面に入て憩ひて在り。經稜素
頼德用堅削們都て生口毎に外面に葛龍石或い老る松に數ふして照文の暇兵伴當們うち成て
たる現庫裏の畳を朽れども猶膝を容る処を遮莫從と求めく戸れば猛可に草を踏メ拂せて
そと打布く。大法師い笈を上座に卸し居て徐に數珠を爪繰て坐の开が身邊に大士と照文代四郎も
陪坐をるに毛野が尸を見て照文が尸今日の闘戰に不慮の事も戰飯の准備をされ孰も東
西欲く此時候べと思へども市遠くて徵めく家に天阪玉い智慮の誉ある好主意いなを問ふに信乃も
推禁めて咱們豫め准備をるに連立來る六兄弟見も竹も表るゆるぐ。その
餘に告ざりけれ先や來歴を解んと事の顛末を原ふに信乃い鄕宮中途に舊稲塚の小松木をのく居
た三人の敵と戰ふ走りて那德用と戰ふに德用い武藝あり且膂力人に勝れて六十行あるん思鐵の鹿杖を
両手に採て一霎時に挑ぎりけれども分に過る器械なれば漸々に如意をて腕乱れて堪ざりけむ怯れ衆徒を
罵励して幇助と討るを急るりけれ初逃る悪衆徒們一度に吐と返し合せて推捕綱て數ん人を時に勢

風猛に起て天を翳る塵霧に敵も信乃さへ仰ぎ吹滾されて打擇ぎ兵別れぞ走ける然い德用も
あ者とら。悪衆徒們も怪し風に怕れて迯て欲然ぐ猛に闇に迷ひて心ともく退去り。欲這頭に敵い在ぎと
猜る。信乃い剛才川の邊を敵の銃鳴ぎ聞て思へ庵主蛮崎生城雪們いふ疾那里へ赴ぎく
安危を倶に思へられ心頻りに邊られて撥拂ふ橋ある方に走りもく欲せに黒白も別を暗けれい鉢投に方
を届らぎて小屋の邊に迷ひ来り訝りぬ。那這と樹の探りつ推量るに編小の路傍に堂宇鄕に
あの処を過ぎて折しも見い正可に是なるべと猜く。姑且風を避んと躯て裏面に入て拐撥ふ四面を
僅に六尺に過ぎて立像の石佛あり。門扉い風吹採られ欲出入に障りなけれ堂座の石に尾を横く風の恬
肇てをるに則是石造の地藏菩薩身材丈許なり。面部に鉄
なる処あり且甚深の布囊の麻の紐を附ける東西と納て銭四五百文勝附ると頂に横ぎ其為体許
あれば食に卸て検るに囊い地藏の頭巾なるべ。米麦雑許藏てあり。熟思へ合れば豆囊に、大庵に施りの

折最後に來ませりとぞ。那忠告の衰老法師が、紀二六が計らひて殘れる米二斗あまりと錢五百文を取らしぬと云ふに、這那符節を合するが如し。然ば那衰老法師は這地藏菩薩の化現にて、米と錢は紀二六が取らせし東西に疑ひなし。その奇異に過ぎれども、熟唐山の故事を思惟るに、豊山の鐘は不敲して鳴り、魏揄の石は非情にしてよく言ふとあり。又僧生公は經を虎丘寺に講ずるに、人これを信ずる者なかりしかば石を聚て聽衆と做ぬに、談義妙理に至る毎に、その石皆點頭きぬといへり。あらば今這神靈奇瑰も亦那等類と云ふべきのみ。畢竟、大老庵主の三十年勤行不怠の積徳天地幽冥に感通して、那災害を這佛のみにも告させぬらし。就然にても常言に縁なき衆生は度しがたしといへり。抑這地藏菩薩は始里見殿に縁ある者の建立する像なるに、思ひ難く、御佛の背のうちをよく視まくば彫做る歳月あり。嘉吉元年七月二十四日建立願主淨西と云ふ二十六言の鮮明に讀れしかば、越に聊考據あり。這淨西を人に問ひて素生を知るものなく、只有作る奇特を庵主のみか義兄弟にも蟇崎们にも告るに、事の照驗あるは虚談とも思はれん。要せよかれと肚裏に主意を定めて決りしかば、地藏菩薩に默禱して、然而勤肚の財嚢より方金一箇を合せつゝ紙に包みて、五百の錢に結附て地藏の項へぞ擔挂とうち載けるほどに、既に佛菩薩へまゐらせする米なれば、則一分の金を添て那と這とを換る而已。然而信乃は書囊頭巾の口を結びつ、引提て徐に外面へ出る程に、這路傍小堂の左右に躱れて信乃を窺ふ兩個の敵あり。是則別人ならず、一個は逸足寺の徳用にて、鐵の鹿杖を青岸に挟て在り、又一個は同院の道人甚六と喚るゝ破落戸なり。明晃々たる中刀の長やかなるを直額に拔翳して、出ば撃んと構へたり。這時信乃が危之と旭に向ふ草の露、路風の前なる燈火に等しかるべしと思ひも掛ず、出るを遲しと待着ける左右一度に郁と聲掛て撃かゝるを、閃りと引外せる神速微妙の標姚に惴りし徳用空撃して倶に找えし、道人は肩尖礪、撃擢けべ呀阿とばかりに叫びもあへず、血潰起て仆れけり。徳用これに驚き慌て、二たび撃んと振抗るを、信乃は撃せぎ右手なる臂を拳揚りに合せ禁て丁と中る白打の妙術、徳用も亦斤斗りて仆れて一霎時氣絶せしを、けんと起べうもあらざりしを、信乃は大刀の緒拔出して最も緊しく結抂りけり。浩処に道節毛野大角荘介小文吾現八們二隊の六犬士は、生拘の僧俗を或は馬ぶらち騎し、或は八個の夥兵に牽せてうち連立ち、來にければ、信乃は逈にこれを視て近つく隨に、六兄弟に二度鬪戰の支の趣、怪風猛に塵埃を起して一霎時

徳用謬る
道人を棒
で殺せ
信乃
と用


神女湯
てくだこ

晦冥に做りしも。迷ふて這里まで路傍なる堂宇の風を避んと料ずも。徳用を擒虜にせらるゝ地蔵菩薩の
霊應利益の首尾を解示して。画裏頭巾の米ともなく仏像の項に挂しある銭と方金さへ指し示
して思ひしよしを告知せれば六犬士は感服を浅して我們は今見るごとく虜にせらるゝ敵の悪僧俗と両所に
戦ひし折も又牽して未だ来ぬ路なれども。みる風塵の起るに遇ねば闇く做りしなれども立意にそむ伏
姫神の霊験冥助なるべし然ば但思ふに這石地蔵の利益にやありけん建立の願主浄西は現和殿の父なる
ごとく今も世に在る人ならねば心地は左にも右にもあれ這石仏の利益に依て四ツ勢の敵を
防ぐべき準備を立地に做ましらん思ひの随に克よといふ。敵の頭人悪和尚們をかくの如く虜に生
なり有信なれ那隊に鉄砲あるとも庵主はちかゞ蟹崎生も媄雪も恙なかるべし。寔に奇妙なる際
かなと称えて倶に跪て地蔵菩薩を伏拝めば側聞せし八個の夥兵も皆駭然と驚き感して深
信胆に銘まで最殊勝く思ひけり這時徳用は息出てしかし我に復りしが信乃は夥兵に索を
取りて画裏頭巾の施米と腰に纏てありてそれぞれとその夥兵に預る折又余の夥兵們に指し示ぬ

徳用が這鐵の鹿杖は後の話柄に做らなん。膂力ある者頓しも左も右もあしらはれぬとて夥兵
們なれど逞く壮なる者一個ありて拾んとすれども及ばねば帮助を喚て二人して辛く力を勠して猶堪べくもあらざ
りければ毛野は大く推禁めて無益の所為に骨を折りぞ。図ねくとも我よりぞ僕が得て乗るけの登時又ナ
角は件の夥兵們にうち向ひて汝們知ずや約莫器械は使ふ者の膂力より二三等軽きを利とす。合ざれば
持得るとも騎馬の挿も自由ならねば遂に不覚を取るとあり譬言は蜀漢の関雲長が八十二斤の青龍刀を
使ひしよしは三尺の童子も知れり然ども那関羽に百二三十斤の膂力あらずんば八十二斤の器械を馬上自在に
使ふこと做し難かるべし抜に大と思ふ者は四十なるべし然ば這徳用は六十斤の膂力あらんに使ふ所の鉄杖は亦
六十余斤なるべく不覚を取りしも其故なりと諭せば信乃は点頭て弁論宜なり其理あり徳用は又
力ありて且武芸なきにあらねども兵法を知ざれば我と両度の闘殺に不覚の同士軍をせしも就て亦一奇事
あり方僅徳用と倶に埋伏して酒家を殺さんと欲して謬て徳用に殺されし這道人を事果て後に
よく視れば那は舊怨ある者なりき犬山和殿は忘れし歟と問へば道節即立寄て道人の死貌を熟視て頭を掉て

咱们ハ、ガ、ヒ、ク、ト、ラ、ヘ、テ、躯て退け。荘仏毛野大角現ハ小文吾も立替りて屍骸を覩て。作麼這道人の何者の故か犬塚和殿か舊怨あるやと詰り問へ信乃ガ答ふ解示ありけれ。今又男と合き忽ち這奴ハ則別人なり。那甲斐の猿石なる。四六城木工作か小厮も出来介と嗔れ。若し曩の名曳か唆誘きまそ。洒家と誣て。不軌淫奔の證人ふるひ。もの役価を発覚れて名曳か死刑に処れ。折這奴ハ追放せられ。人見とりの後那里か存るも知るゝ。絶てなりしふの地ハ這奴か故郷なる。然らば流れ来ふける。今又我を殺さんとて同士殺をせられて身を喪ひ因果覿面といふべし。その餘も陰悪積悪の餘殃ふるまさに。ふんぎりあり。蛮崎生か伝ふる。那安西出来介ハ義侠の與か身と殺して芳し名と貽す。這奴も他と名ふる同くて善悪邪正死ざるを。雲壤の差あり。亦是宋魯の曾参欲ても敬言と做もつべきを。然ハ思いまそと解示せば大家敬焉。且嗟嘆まそ。天理彰々隈る紀を。亦今市ふかこみけり畢竟信乃か不用意か表顕ふる米の来歴を。大照文们か解示まそ後の話説甚麽ぞや。開ハ下の回か解分ると聴ねかし。

南總里見八犬傳第九輯卷之十九終